

## 5 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 5 月 28 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「“霊”が語らせるままに」

■聖 書：使徒言行録 2 章 1～13 節（新約 p214～215）

■讃美歌：342 「 神の霊よ、いまくだり 」

343 「 聖霊よ、降りて 」

本日は聖霊降臨日（ペンテコステ）の礼拝をささげています。先ほど、使徒言行録の 2 章 1 節から 13 節を司式者にお読みいただきましたが、そこにペンテコステの具体的な様子が記されています。使徒言行録は、書き出しである 1 章 1, 2 節に「テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。」とあるように、ルカによる福音書と同じ著者が、復活した主イエスと使徒たちとの関係を描いていると言われています。今年のイースターは 4 月 9 日（日）でしたが、その次の 4 月 16 日（日）にはルカによる福音書 24 章を取り上げました。そこでは、主イエスの十字架の出来事に絶望してエマオへと去って行く二人の弟子たちを追いました。住イエスは、見知らぬ旅人として彼らの同伴者となり、食事の席で「**パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった**」（ルカ 24 章 30 節）ときに、彼らの目が開けて主イエスと分かりました。しかし、その時はもう主イエスは消えておられたことをお話ししました。そして、4 月 23 日（日）には、二人の弟子が戻ったエルサレムにいる仲間の弟子たちのところに復活なさった主イエスが現れたことも、ルカによる福音書から取り上げてお話ししたと思います。その延長線上で、本日の箇所は描かれていると考えることができます。

さて、1 節をご覧ください。「**五旬祭**」と訳されているのが「ペンテコステ」という言葉です。それは「五十日目」、あるいは週報の右欄に記しておきましたが「50 番目の」という意味の言葉です。その日はユダヤ人の最大の祭である過越祭から五十日目にあたり、五旬祭（ペンテコステ）が祝われていたのです。その日に、主イエスの約束通りに弟子たちに聖霊が降ったのです。2 節に「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」とあります。聖霊、すなわち主なる神様の霊は風にたとえられることがあります。風は私たちの目に見えません。しかし確かに吹いてきて、私たちに働きかけます。聖霊が弟子たちに吹いてきて彼らを新しくした、それがペンテコステに起こった出来事だったのです。3 節には「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」とあります。「炎」、それは神様が

人間にご自身を示し人間と関わりを持とうとされる時に現れるものです。出エジプト記3章では、モーセが神の山ホレブで、燃え上がる柴の炎の中から神様のみ声を聞いたことが記されています。ですから、聖霊が降った時に炎のような舌が弟子たち一人一人の上にとどまったというのは、まさに神様ご自身が彼ら一人一人に出会い、働きかけて下さったことを現わしていると言えます。そのことはまた、その聖霊の働きが彼らの内面から生じてきたのではなく、外から与えられたものであること、そして炎のように私たちを焼き焦し、新しく生かすのだということを現わしているのです。このことも、主イエスによって与えられた御言葉によって心が燃えるということにつながっていくのではないのでしょうか。この炎の赤い色を思い出すために、ペンテコステの礼拝には、何か赤い色のものを身に付けて礼拝に集まるという風習も、教会によっては行われているようです。

そして、本日特に注目したいのが、3節の「炎のような舌」です。神様からの炎が、弟子たち一人一人に、新しい舌となってつまり「語る」力として与えられたと考えることができます。ですから、4節には「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」と描かれているのです。聖霊に満たされた者は、「“霊”が語らせるままに」語り出すのです。ところが、7節には「人々は驚き怪しんで言った。『話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか』」と記されています。ペトロをはじめとして主イエスの弟子たちのほとんどは、当時は辺鄙な田舎として見られていたガリラヤ出身の漁師などだったと考えられます。そのような彼らは、人前で整った言葉を用いて話すことなどなかったと思われまふ。そういう弟子たちが学んだこともない外国語を突然話し出した、ここでの出来事はそのような奇跡だったのです。なぜなら、5節以下に記されているように、当時のエルサレムには、あらゆる国から帰って来たユダヤ人たちが住んでいたのです。彼らと本当にコミュニケーションをとろうとすれば、それらの人々の故郷の言葉で話をすることが何よりも必要だったからではないかと思ひます。そして、9節、10節の地域名は当時のイスラエル（ユダヤやサマリヤなど）を中心に考えるならば、東、北西、南西、そして、遠く離れた「地の果て」であるローマまでを取り上げています。しかしこの後、弟子たちが突然話せるようになった外国語を駆使して華々しくそれぞれの国で伝道していった、ということは記されていません。そうではなくて、その時に聖霊が降ったことにより、11節の終わりに、「神の偉大な業を語っている」と言われているように、神様の救いのみ業、具体的には主イエス・キリストの十字架と復活による救いが様々な国々の言葉で語られ、そこから主イエス・キリストの福音が全世界に宣べ伝えられていくことになった、ということ語っているのです。

さらに、ここでは、どうしても忘れてはならない大切なことが語られています。この箇所を次のように解説している方もいます。「聖霊を受けた弟子たちが、様々な国の言葉を語ることによって、新しいイスラエルの民が結集されている、それは、旧約聖書の創世記の 11 章におけるいわゆる『バベルの塔』の物語において起ったことの反対であり、その解決である、ということです。バベルの塔の物語は、『世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。』ということから始まっています。その人間たちが、シニアルの地に、天にまで届くような塔を建て始めるのです。「天にまで届く」というのは、神様のおられる所にまで届く、つまり神様の領域にまで人間が自分たちを高め、力を及ぼしていこうとすること、つまり人間が神に成り代わろうとすることを象徴しています。……神様は、人間のそのような傲慢な、不遜な営みをご覧になり、人間の言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられないようになさったのです。それによって人間は全地に散らされていき、それぞれの違う言葉を語りつつ生きるようになったのです。つまりこのバベルの塔の物語は、この世界に様々な違う言葉があり、違う言葉を話すものどうしは通じない、という現実の原因を語っているのです。」

そのような状況を描く様々な国々の人々が集まる中で、聖霊の働きによって、皆、同じことを聞いたのです。いわば、言葉による新しいコミュニケーションの可能性が開かれていったのです。それが、ペンテコステの日に起った出来事でした。けれども、私は 13 節で記されている「13 しかし、『あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、あざける者もいた。」という状況描写に、どうしても心が向いてしまうのです。それは、聖霊が降って教会が誕生したという聖書の御言葉をこれまで何度も読み、また多くの方々に語ってきたはずなのに、そのことを完全に無条件に受け入れていない自分自身の深い罪の姿かもしれません。しかし、そのありのままの姿をはっきりと見つめ、心から「聖霊よ、降りて 弱きわれをも 聖なる力に 富ましめたまえ」と祈ることができる、それがペンテコステの恵みだと確信しています。